

木製壺鐙（もくせいづぼあぶみ）

出土場所：北西端の調査区（T 6）の河川跡から出土しました。河川跡は幅 10 ～ 16m、深さ 1.4m（現地表面から約 2.3m）の規模で大きく蛇行しながらながれていました。壺鐙は現地表面から深さ約 2.0m の、植物遺体を大量に含む褐色粘土層に横転した状態で出土しました。

大きさ：幅 14.2cm、奥行き 16.1cm、舌部長 4.0cm、高さ 8.4cm）

材質：針葉樹（樹種の同定は実施していません）

年代：古墳時代後期（5 世紀後半～6 世紀前半）

古代の木製壺鐙は全国的に見ても 20 数例が知られるのみで、県内では東近江市（旧能登川町）の斗西遺跡（6～8 世紀）について 2 例目の出土となります。漆の塗布は認められませんが、丁寧に仕上げられており、優品といえます。共に出土した遺物の年代から古墳時代後期（5 世紀後半～6 世紀前半）のものと考えられ、全国的にみても古い段階の事例となります。

また、この地にいち早く乗馬文化が導入されていた状況を示す資料であり、古墳時代後期に急速に乗馬文化が広がる過程を具体的に示すものとして、重要な意味を持ちます。





木製壺鐙が出土した古墳時代の川跡



木製壺鐙